

第6回 こうしてマイは南極点でカメラのシャッターを押す

ひたすら走るうちに、砂漠は草原に変わり、月は西の空へとまわる。

林が現れ、その中を抜け出て、しらじらと朝を迎えるところに海辺に到達する。

——こんどこそは夜明けの浜で50両のサイフ……というわけにはいかないだろうなあ。お金さえあれば、あんなオオトカゲに悩まされることはなかったんだけど。

右手に波音を聞きつつ、すぐには浜に出ないで、しばらく海岸に並行する道を走る。

——カンガルーが助けてくれたのはありがたかったけれど、ああいうのをニヒルっていうのかもしれないけれど、なんか違うのかも。あれじゃあ、どうもなあってな感じ……テキトーに決めつけるだけであんまり考えているよう

にもみえないし、ボクだって、やる気ががつつり出すタイプじゃぜんぜんないんだけど、パイプをくわえているだけっていうのはどうもなあ。

ネットに書き込みをしたのは、ささやかではあっても勇気をふるっての行動だった。その結果として、思いもよらぬいやな現実を突きつけられてへこたれはしたけれど、後悔はしていない。

道がカーブし、石ころはなぎさへところがつて行く。

「やっちめえよ。泣いたからって、許しちゃなんねえ」

ドスのきいた声が響く。

前方にいくつかの人影がある。明るくなってきた空を背景に長いものを振りまわしているのが見える。

——またヘンなことに巻きこまれるのかも……知らん顔で通り過ぎるってわけにはいかないんだろうな。

石ころを追って行くこの展開にいくらか慣れてきたマイは、次の出来事に対応すべく心構えをする。

断片的に聞こえてくる声は雰囲気のいいものではない。

アロハシヤツをだらしなくはおった数人の男がめいめいサオやらスコップやらモリやらを手にし、振りあげたり砂をたたいたりして、わめきちらしている。

石ころはころころとそのさわぎの中へとはいって行く。

「いいから、ぽかっとやっちめえなよ」

「あたいらも、これっぽこりのために乱暴したいわけでないではないんでありましゅよ」

「アホか。なみだなんか同情したらあかんやないか」

男どもがつくる輪の中央に大きなカメがうづくまっついていて、そのかたわらに白い卵が積まれている。石ころはそのすぐ横を通って、輪の向こう側に抜けて止まる。

「ほら、ぐずぐずしていたから、人がきちまったじゃねえか」

ひとりがちらりと視線を送ってくる。

「例のうるさい連中だと面倒だ。卵に砂をかけておかんかい。はよせんかい」

——これって、もしかして、あれですか、浦島太郎の世界？ 石ころが連れてきたということは、ここでボクに浦島太郎役をさせるっていうこと？ カンガルがパイプをくわえているだけなのを批判したから、だったらやってみなっということ……。

「中学生の変死体発見！」

——あのモリでほかつとやられたらそうなりますよ。

マイが少し離れて足を止めると、男たちはいっせいに帽子やらバンダナやらヘルメットやらを頭からとって、

「おはようさんでござえます」

声をそろえてあいさつしたので、マイもパーカーのフードをはずして、

「おはようございます」

「朝早くから、お散歩でござえますか？」

いちばんごっつい感じの男が腰をかがめてじろじろとマイを見る。いかに

も人相がよろしくない。

「ええ、まあ、そんなところですよ」

「結構でやんすな。朝の散歩は気持ちいいもんでござえましよう」

「あたいらも、こんな早くからこんなふうに集まってるんだけども、別にあやしいことをしているのではないんでありましゅよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

マイは聞かないふりをして、

「波の音に誘われて歩いていて、たまたまちよつと通りかかっただけなんです」

「結構でやんすな。朝の浜は格別でござえますからな。ただ、ここらは人けの少ないところでござえますから、ひとり歩きはお気をつけなすったほうがようござえますよ」

「あたいらも、こんなふうに集まっているんだけども、あたいらはちがうんだけども、ここらにはあやしい連中がうようよしていたりするんであり

ましゅよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

マイはそれも聞かないふりをして、

「あのう、皆さんもお散歩ですか？ それとも釣りですか？」

男たちは手にしたサオやらスコップやらモリやらをガシッと持ち直し、

「ええ、おっしゃる通りでござえます」

「あたいらも、こんなふうに集まっているんだけど、別に見られたら困るようなことはなんにもしていないんだけど、なかには口ふさぎに乱暴を働く者もここらにはいるんでありましゅよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

「ボクはホントにただの通りすがりで、ここからあちらに行くだけなんです」

マイは石ころのころがった方向をさし示す。

「結構でやんすな。この広い浜はどなたさんの持ち物でもありませんから、どこをお通りなさろうと自由でござえます。散歩でたまたまお通りなので」

ぜえましよう。あちらでもなく、そちらでもなく、ここをわざわざお通りなのでござえましよう」

「あたいらも、こんなふうに乗集まっているんだけど、悪いことをするよ  
うな者ではないんだけど、関わり合いになると大変な目にあう連中もこ  
こらにはいるんでありますよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

カメはと見ると、短い首をコウラから出したりひっこめたりしている。

——助けてくれて言いたいのかなあ。浦島太郎かグリーンピースならそう  
するだろうけど、これだけ大勢の陰悪そうな男どもがいて、さすがにちよっ  
とムリじゃないでしょうか。

「あのう、まことに申し訳ないのですが、そこをちよつと通していただけな  
いでしょうか？ 向こうに行きたいだけなんです。お願いできませんでし  
ょうか？」

「ていねいに頭を下げる。」

「なんでごぜえますか？ この浜のどこを通ろうと自由でごぜえますが、これだけ広い浜辺で、よそのどこでもなくてここを通るので、あつしどもに「ここらどけと？」

「いいえ、そういうわけではなくて、ちよつとで、一瞬でいいので、道を譲っていただけたらうれしいと、それだけのことなんです」

マイは石ころをうらめしげに見る。

——カッコよくカメを助けられたらそりやあいですよ。だけど、ぽかっとやられたらいちころじゃないですか……あれっ、待てよ、何も石ころとびつたり同じコースをたどらなければならぬなんてルールはないのかも……。

そう思ったのは少しだけ遅すぎたのだろう。

「あのう、ボクは、あっちを……」

そう言うよりも先に、男たちはサオやらスコップやらモリやらをズンと砂に突き立て、

「よろしゅうございましょう。道をお譲りしてもよろしいのでごぜえますが、



そのためにはお譲りしやすいようにしていただきましようかな」

「あたいらも、こんなふうに集まっているんだけど、悪いことをするよ  
うな者ではないんだけど、ゆすってありガネを全部まきあげるような連  
中もここらにはいるんでありましゅよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

「ごめんなさい。ホントにただの散歩なんです。そっちをまわって行くよう  
にしますから……」

男たちは左右に広がって、マイの動こうとする方向をふさぐ。

「この様子をご覧になって、そのまま行こうというのでござえますか。お通  
りいただくからには、何もなかったようにしていただきましようかな」

「あたいらも、こんなふうに集まっているんだけど、カネほしさに言っ  
ているのではないんだけど、四の五の言うど何をするかわからない連中  
もここらにはいるんでありましゅよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

マイは身を縮め、カメはと見ると、首を大きく伸ばしてあくびをしている。

——ん？ あやしいぞ。

「あのおう、それで、どうしたらいいんでしょうか？」

「こちらからは申せません。いいようにしていただきたいだけでござえます」  
「あたいらも、こんなふうに集まっているんだけども、ゆすりとかたかりとかではないんだけども、平気で法に反することをやる連中もここらにはいるんでありますゆよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

——うーん、どうする？ こういうところにあのオオトカゲが出てきて、こんな連中を死刑にしてくれたらいいんだよなあ……そうだ、オバコちゃんか言ってたよ。「直球だけじゃなくて、山なりの超スローボールで空振りついでうのものあるんじゃないの」って。ばしばしバトルを繰り返していたときだったけど。それを試してみますか。

マイは頭をぼりぼりかいて、

「あのう、正直に言いますと、ボクは散歩をしていたのではないんです」

「というと、海岸の監視でござえますかね」

「あたいらも、こんなふうに乗っかっているんだけど、人の目をさけてい  
るのではないんだけど、見られては困る連中もここらにはいるんであり  
ましゅよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

「実を言うと、50両のはいったサイフをさがしているんです」

「50両のサイフ？　なんでござえますか？」

「魚屋の勝さんです。勝さんはもちろんご存知ですよ。この浜にいて魚屋  
の勝さんを知らないなんてことはまさかないですよ」

「なんでござえます？　勝さんですか？」

「いままでごんでいた顔が、急に自信なさげになったのを見て、

——あれれ……。へえ、もしかして、ここは、口からでまかせ、メチャクチ  
ヤな変化球でやってみますか。」

「この土地にいて、しかも浜で仕事をしていて、勝さんを知らないなんてことがあるんですか？ 信じられませんか。もしかしてまるっきりのしろうとさんなんですかねえ」

マイはキヨンの真似をして鼻の先をしゃくりあげる。

「おい、おめえたち知っているか？」

「あたいらも、こんなふうに集まっているんだけども、昔からずっとこの浜にいてることになってるんだけども、なかにはよそからふらつとはいり込んできたばかりの連中もここらにはいるんでありましゅよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

マイは、はったりぶちかまし作戦全面展開で、

「あーあ、やっぱりそうだったですか。だと思いましたがよ。まるっきりのしろうとさんとは、どうにもなりませんね。はーん、魚屋の勝さんを知らないから、平気でそんなことをしていられるんですよね。魚屋の勝さんも知らずにねえ、この浜でねえ、よくやれますよねえ」

マイは顔をしかめて、首を大きく左右に振る。

「あのう、魚屋の勝さんって、どんな人でござえますか？」

「どんな人って？ 聞かずにいた方が身のためということもあるんじゃないでしょうかねえ。泣く子も黙る魚屋の勝さん、グリーンピースもはだしてでげる魚屋の勝さんですよ。知らなきやまだしも、知ってこんなことをして、魚屋の勝さんの耳にはいりでもしたら、さあて、どうなることやら」

マイは胸の前に腕を組み、オオトカゲのようにぎしぎしとふんぞり返る。

——何やってんだか……。

男たちは小さくなつて、

「おい、おめえたち、どうする？」

「あたいらは、恐いもの知らずのワルだったりするんだけど、実はみかけだけでへなちよこつていう連中もここらにはいるんでありますよ」

「アホか。自分からそんなこと言うたらあかんやないかい」

男たちはサオやらスコップやらモリやらを引き抜き、

「とんだご無礼をいたしやした。どうぞ、どうぞ、お通りくだせえやし。それでもつてどうか、その魚屋の勝さんとかいう大親分によろしくおっしやつてはいただけないでしょうか。あつしらはこの浜に流れついて、しがねえ渡世をしているだけでござえます。大親分さんにはいずれこちらからごあいさつにお伺いするということだなにとぞよしなに……」

「通していただければボクはそれで十分です」

「へえ、どうぞ、どうぞ」

男たちが左右に分かれた間をマイはいばつて歩く。

——これでいいのかなあ。なんでうまくいっちゃったのかさっぱりかわかんないけど……。

「やい、カメ公。てめえも道をあけなよ。もう泣きまねなんぞしねえでいいからよ。魚屋の大親分さんに仁義を切らねえと、もう商売にならねえんだよ」  
ウミガメははずるすると後退する。

——なんなの？ 捕まって仕方なくやらされているの？

「もし50両のサイフをみつけたら、届けてください。魚屋の勝さんもそれで機嫌よくしてくれるでしょう」

「へえ、必ずそうしやす」

マイは肩をゆすって歩み、石ころが進み出すと、

——早く、早く！

ぴゅうつと一目散に逃げる。

顔じゆうに噴き出てきた汗をぬぐいながら、

——なんか逃げてばかりだよ。

砂をけって波打ち際におりて行くと、

「にいちゃん、うまくやり抜けましたなあ」

しわがれ声とともに、ヨシやらワラやらを積みあげたゴミの山がもっさり

動き出す。

びっくりして足を止めると、ゴミの山が人間に変わる。

——だれ？

「何を隠そう、魚屋の勝とはこのわしじゃ。勝手にわしの名を使いおつて！」

「わつ、ごめんなさい」

マイが跳びあがると、

「わつはつはつ。人をだますとだまされる。このヒゲを見てわからんかな」  
まっ白な長いヒゲが顔をおおっている。

「えーと」

ゴミの山と見えたのは、頭にかぶった笠やら腰みのやらが一体化したもので、

——ひよつとして浦島太郎？

「わしにもいちゃんみたいにやればよかったよ。うらやましい」

「いまのを見てたんですか？ 苦しませで、あんなことをしちやっただすけど」

「うまくやったもんだ。カメに同情して助けてやろうなどとして、このざまだ。わしだって、もとはにいちゃんに負けないくらいの紅顔の美少年だった



「んだけどな」

老人は白いヒゲをしごいて嘆息する。

——紅顔の美少年？ ボクがですか？

そのひと言にマイは氣をよくする。

「もしかして、あなたは浦島太郎さんなんですか？」

「ああ。乙姫の色香にまだお忘れ、世間のもの笑いのタネとなり、いまだに週刊誌の『あの人はいま？』みたいな企画で追いかけて回されたりするんで、遠くここにきて、人目を忍んで魚を釣って命をつないでおる。なぜかあの連中も近ごろここにやってきて、まったく困ったものだ」

「乙姫様というのはいく人だったんですか？」

「くそいまましい。あんな女にだまされて、一生を棒に振ってしまった。

サイテーの女だ」

「そうなんですか？」

「悪ガキもカメもタイもヒラメもみんなあの女の手下だったんだよ。わしは

若かったらつい正義漢ぶろうとした。童宮城に案内されて、わしはいい男で善人だから、乙姫からこういう扱いを受けるのも当たり前とうぬぼれて、つまり結局はわしが甘かったんだよ。あの女のねらいはただひとつ、わしの若さを吸い取ることにあった。にいちゃんもあぶないところだった。うっかりカメを助けてみる、童宮城に連れて行かれて、わしと同じさまだ」

「それはこわいですね」

「こんな老人にされて放り出されてみる、保険料なんかまるつきり未納だから年金はゼロだよ。なさけないね。にいちゃんもくれぐれも気をつけな。余計なことをしたり、一時期の快樂にうつつを抜かしたりすると、わしみたいになつてしまうからよ」

「はい、注意したいと思います」

「しかし、それでいながら、童宮城での日々を未練がましく想い出したりするんだから、人間というのはどうしようもないものだ」

浦島太郎はかぼそく笑うとまたゴミの山と化し、にゅっと一本の竹の釣竿

が出ているだけとなる。

石ころは先に進んですでに海上にある。マイも走って海に出る。

——えーと、いまのはどういうできごとだったんですか？ 余計なことに鼻をつつこむとろくなことにならないっていう教訓？ それでいいんですかねえ。

朝日が昇ってきて光が広がり、ゆるかなうねりが海上に縞模様を描き出す。

——この海はどここの海？ オーストラリアを通って海に出たんだから、南氷洋ってこと？

走るうちにうねりが次第に高く大きくなる。空には灰色の雲が流れ出し、ときどき太陽をおおうようになる。ヒュウヒュウと風がうなり始める。

——これは嵐になる？ 走り出してから、なんかいいことがあったかなあ。こんどは南氷洋で嵐ですか？ ちよつとひどくないですかねえ。

石ころの方をにらむと、いきなり大きな波がザーッとやってきて、マイと石ころの間を隔たらせ、黒雲がびゅんと飛んできて太陽を隠し、あたりがに

わかにか暗くなる。ビューツと強い風にもあおられる。

——ちよつと、やめて！ ホント、意地悪じゃないですか。内緒でぼやいたくらいで、これだもんな。

声に出して、

「ごめん、ごめん、ごめんなさい。もう決して文句言ったりしません」

——さつきもこんなことがあったつけ。

マイが謝るとすぐに波が通り過ぎ、日の光がさして、石ころの姿が見えるようになる。

両手を合わせ、

「頼みます！ あなたが頼りです」

——ホント、頼りですよ。南氷洋から南極に向かっているんだもの。マジで『南極探検』じゃないですか。石ころのやつとケンカなんかしている場合ではないですよ。

素直に石ころの後について行くのだが、それでも波は高さを増し、次々に

黒い雲が飛んできて、太陽は出ている時間よりも隠れている時間の方が長くなる。風もびゅうびゅう吹きつけて、走るのがかなり大変になる。

目の前に白い壁がいきなりどんと現れる。

「わっ！」

石ころが垂直に跳びあがる。

「えいっ！」

マイも跳ぶ。

—— 冰山だ！

冰山をひとつ跳び越えると、前にまたひとつ冰山がある。

—— これじゃあ、タイタニックだよ。何をやらせるのやら……。

石ころがまた跳ぶと、映画のシーンを想って腕を広げて跳ぶ。

着水すると、太陽はすっかり消えてしまい、見えるのは、白い波頭と冰山からのわずかな反射、そして石ころだけになる。

強い風に乗ってべちゃべちゃとみぞれが吹きつけてくる。

——まいったなあ、こりや。

みぞれは間もなく吹雪に変わり、顔に氷が張りつく。それを払いつつ、氷山を跳び越えなければならぬ。

マイはまたぼやきそうになり、

——いえ、楽しいですよ。こういうところに連れてきていただいて、たいへんうれしゅうございます。

前方がぼうつと白くなる。

「南極だ！」

——本当に南極にまでくるとは……これってホントですか？ 現実？ やっぱり夢？

そんなことを考えたところで答えはない。

石ころは大きく跳ねあがって南極に上陸し、マイも海面をけってジャンプし、両足をそろえて氷の上に跳び乗る。

「わあああ！」

いきなりすべって、一度すべったが最後、どうにも止まらない。

あいにくとスケートの経験がない。いつだったか学校の行事でスケート教室があったのだが、そんなものはさぼった。

完全にコントロール不能。ゴウゴウと音をたてる強い風にあおられ、吹雪にもみくちゃにされ、あたりが真っ白で何がなんだかわからない。

——どうなっちゃうんだ？ これってブリザード？ ホワイトアウト？ どうしてこんなにいろんなめにあわせるんだ！

文句を言いたくなるが、この状況下では、見えたり消えたりしている石ころをただただ頼みとするしかない。

ドドドド。

風以外の音が聞こえてくる。

——これはなに？

ブウーン。

距離が近づいて、はっきりとエンジンの音だと知れたときには、

——うそっ！　ぶつかる〜！

右に曲がることも左に曲がることもできず、足を踏ん張ってブレーキをかけようとしてもスピードは少しも落ちない。

「あっ！」

ボンヨヨヨンとぶつかって、その反動で氷の上のところがつてかろうじて止まる。

にわかには風がおさまり、白くおおっていたカーテンがぱつと晴れあがる。

ごっつい形の雪上車がキャタピラを上にしてごろんと一回転して、もう一回転して、三回転目にはいりかけて、

ブフーン、ブフブフ。

エンジンが力なくなつて、バランスを取りもどそうと、ぎったんばったんシーソーのように動いて、かろうじて水平姿勢を得て、あえぎあえぎその場でぐるぐる向きを変える。

——あっちゃあ。ボクがやっちゃった？



マイは、つまさきにほんの少し痛みを感じただけだったのだが、雪上車の方は壊れてしまったのではないかと、淡い雪明りのなかで目をこらす。

雪上車はみしみしいながら止まり、ヘッドライトがマイに向けられる。そのまぶしい光を手でさえぎりながら、様子を見ると、雪上車の横の小窓がパカッと開き、

「あらまあ、いまのはなんだったんでございましょう？」

ひどくハスキーな声だ。

マイはヘッドライトの直射から横に抜け出るようにして、雪上車に少し近よる。

「あらあら、おたくはなんでございます？ 今日とはとんでもなく悪い天気でございますけれど、地球の気候がよっぽどおかしくなってしまったのかしら。南極の真ん中にお子ちゃまが降ってきましたよ。まあ、もしかして、雷様のお子？ おへソ取ったりなさいますう？ オゾンホールの穴から落ちてきたんでございましょうか？」

——んっ？ おねえさん？ おじさん？ あの声は、もしかしておネエ系ですか？

「あのお、ボクは上から落ちてきたんではなくて、氷の上をすべってきたんです」

「やだあ！ ウツソお、ふつうに日本語？ 雷様の子が？ これって、どういうこととでございませぬの？ つまり、二階から目薬ってことかしら？」

——ん？ このことわざ、どういう意味？ 落ちてきたってことが言いたいの？

「ボクはふつうの人間です。氷の上をすべって止まらなくなって、それでぶつかっちゃったんです」

「まあ！ すべってたの？ フィギュアスケートの練習でもなさっていたのとでございませぬ？ それでぶつかったの？ 危ないわ。つまり、仏の顔も三度までつてことかしら？」

——はあ？ 意味がよくわかりませぬ。

「ええと、どう説明したらいいのか……ボクはスケートが苦手なんで、だからよけられなくて……。そちらはケガとかなかったでしょうか？」

「あら、気をつかってくださるの？ あたしも、スケート苦手よ。それでも南極にきちやったのよ。おたくと同じね。あたしは、そうねえ、だいじょうぶみたい。それに、ぶつかってくださって、ちょうどよかったみたいな感じ。つまり、赤信号みんなで渡ればこわくないってことかしら？」

「あのう、それはどういう意味でしょうか？」

「やだあ、もう。占いに決まっているじゃありませんこと。おたくもいま見ていらしたでしょうか？」

「占いをですか？」

「ほら、この時間っていろんなチャンネルで今日の占いをやってるじゃないですか。おたくは見たりなさらないんでございますか？」

「あいにくとテレビがないんで……」

「もうやだあ、ほんとなの？ 占いを（覧にならないなんて、信じられない。」

まあ、どういうことでしょう？　つまり、白髪三千丈ってことかしら？」

いちいちことわざのようなものをくつつけるのはどうやら意味がなさそうなので、気にするのはやめて、

「今日の占いはどういふことだったんですか？」

「それよ、それ。あたしってねえ、もう最悪じゃないですか？　だって、よろしいこと、今日の運勢は『オオトカゲにヘソをなめられる』っていうのよ。

それって、どういう意味だと思います？　おわかりになります？　つまり、

**A rolling stone gathers no moss**（つっこ）なのかしら？」

「えーと、まるつきりわかりません、そんなヘンな運勢をテレビで言ってたんですか？」

——オオトカゲ！　まさかでしょう。あれが南極にまでくるっていうこと？

「そうなのよ、ヘンよね。だって、あたしって、トカゲが大きらいな人じゃないですか。それで、トカゲがいない場所に行きたいって、ひたすらそれだけの理由で南極にきたんでございますのよ。それなのに、オオトカゲにヘソ

をなめられる運勢って、ふぎけんなよって、そうは思いませんこと？ つまり、千代に八千代にさざれ石のってことかしら？」

「はあ……まったくわからないです」

「でもね、運勢を变えるおまじないっていうのがあるじゃないですか。それに望みをかけたら、ひどいのよ。いまずぐに2回逆立ちしてくださいって言うんでございますのよ。それってありえないでしょう。だって、狭い雪上車の中にいるんでございますよ。それでどうすればいいんだ、ふぎけんなよって、テレビに向かって叫んでしまいましたの。そしたら、おたくがぶつかってきて、雷様の子なら、おヘソを取っていただければオオトカゲになめられる心配がなくなつてよろしいかもって思ったんでございますが、ごろんごろんと2回転させてくださいましたので、これってきつと2回逆立ちしたことになるわよね。そうよね。つまり、あれっでしよ、安心してください、恋するフォーチュンクッキーってことかしら？」

「はあ……たぶん、そういうことなんでしょう」

「だったら、お礼を言わないといけませんわよね。どうもどうもありがとうございますサ  
ンキューおぼけのQ!」

「ただ偶然にぶつかってしまったただけなんですけど」

「あら、でも、いやだ。2回逆立ちはラッキーでしたけど、ころがったせいで車の向きがまるつきり変わってしまったみたい。あたしって機械オンチで方向オンチの人じゃないですか。トカゲがきらいで南極にきたただけなんで、やる気ゼロでございましょう。遊びは真剣、任務はテキトーで、とりあえず調査時間が終わるので、そろそろ基地に帰ろうかなあなんて思ったりなんかして、基地はどっちなのかなあって、さつきトランプ占いをしたんでござい  
ますよ。で、そっちの向きに進んでいたんでございしますが、どうしましよ、  
すっきりわからなくなっちゃいましたわ。これはピンチよね。つまり、人  
民の人民による人民のための政治ってことかしら?」

「それで、基地はどの方角なのでしょう?」

「犬が北向きや尾は東って言いません? だから、東よ」

「なんかちがうような気がするんですが、東でいいんですか？ それだったらずぐにわかります」

マイは石ころの方に向き、それに対して直角に左腕を伸ばし、

「こつちが東です」

「まあ、ありがとう！ おたく、お子ちゃまなのに、すごいじゃないですか。なーんにもない氷の上で方角がわかっちゃうなんて、つまり、車内での携帯電話による通話にご遠慮くださいってことかしら？」

「はあ……というよりも、これは、もしもカメラよカメラさんよってことなんだと思いますけど」

「やっぱり、そうよね。あたしもいまそつちかなって思ってたのよ。おたくとはとつても気が合うみたい」

「そうは思わないですけど……」

「よかったあ。あやうく、古池やかわず飛び込むになるところだったのよね。あたしってトカゲもですけど、カエルもきらいじゃないですか。ありがと。」

あつ、でも待って、心配になってきた。これで基地に帰ったら、何を調べてきたってきつと聞かれますわよね。あたしってやる気ゼロの人じゃないですか。これでまた成果が何もないってことになるよ、もうただじゃすまないわよね。きつと、『何度言ったらわかるんだ！ もう朝三暮四だぞ！』って、どなられてしまいますわよね」

「そうなんですか？」

——どうせなら、きつきの「仏の顔も三度まで」をここで使うんでしょうに。

「どなられるのっていやじゃありません。帰るまでになんかうまい言い訳を用意しておかないといけませんわよね。ねえ、どう言えばいいのか考えてくださいませんか？」

「えっ、ボクがですか？」

「そうよ。だって、ここにはおたくとあたししかいなくて、あたしって、ほら、ウソとか考えるのがぜんぜん苦手な人じゃないですか。だったら、おたくが考えるのがあたりまえですわよね。つまり、子どもは風の子ってことじ



やないかしら？」

「でもボクは事情も何もまったくわからないからムリだと思えますけど。つまり、伊東に行くならハトヤなんじゃないでしょうか」

「それよ、それ。だから、うまいこと考えて！」

「ちよつと、それは……」

「はつきり言つて、おたくはそれくらいのことなさらなくてはよろしくないんではございませんの？ そのみつともないくらい地味なパーカーだけで南極のブリザードの中でも平気でいられるんでしょう。現実的な苦勞とは無縁ということじゃないですか。おたくばかりがのほほんとしていられて、このあたしが苦勞するっていうのはずるくありません？ でしょう。つまり、天は人の上に人をつくらずってことなんじゃないですか？ そうは思いませんこと？」

——うーん、なんか少しだけなら意味が合っているのかも……。

「あのう、ボクはいまはたまたまここについてこんなふうに乗そうにしていま

すけど、実際のところはいろいろあって大変なんです」

「そんなことはよろしいのよ。おたくのことはとりあえずここではいいの。あたしって暗い話は好きじゃない人なんですもの。でもね、ちゃあんとわかっていますのよ、おたくのことは。つまり、フレミングの左手の法則と、右手の法則ってことでございましょう」

「はあ？」

おネエ系は両手の指を3本立てて、ひねくりまわしながら、

「あら、ごめんあそばせ。おたくってまだ中学生？ あたしって、こうみえでも理科系じゃないですか。これがいちばんわかりやすかなあって思ったんでございますけど、だったら、これならわかるかしら？ 『子いわく、友あり、遠方より来たるあり、また楽しからずや』ってことでございますわよね」

マイはさっぱりわからないながらも、

「もしかして、ボクとおねえさんとは、どっか共通性があるっていうことが言いたいのでしょうか」

「そうね、表裏一体、鏡の向こうとこっちよね」

「わかつてきました。つまり、同じ穴のむじなってことですよね」

「そんなふうに分かったら、みもふたもないんじゃないかとあります。でも、そこまでわかつているんだったら、どうなの、言い訳はもう考えてくださいましたわよね。まだなの？」

「えーとですね、ヘンな言い訳を考えるよりは、任務をきちんと果たそうとした方がいいのではないのでしょうか？」

——鏡の向こうとこっちのおネエ系なんだたら、シヤキつとしてもらいたいよねあ。

「まあ、なんてこと言うんでしょう。あたしってやる気ゼロって、これで何回言ったかしら。このまま基地に帰したら、あたしは泣かされてしまうかもしれないのよ。そんなのってあっていいことじゃないわよね。つまり、すいへいリーべぼくのふね、鳴くようぐいす平安京ってことじゃありませんこと。」

「そこんところはどうも……」

「あたしはおたくの大変なことをわかってさしあげましたのよ。それなのにひどいじゃないですか。もう、こうなったら、つまり、一列らんぱん破裂しちゃいますから、覚悟なさい！」

ブーン、ブーン！

雪上車のエンジンがものすごい音を立て始める。

「気を悪くさせてしまったみたいでごめんなさい。でも、ボクとしては、ほかならぬおねえさんにはしっかりしていただきたいと思うのです」

「もう、やなこと言わないで！」

雪上車はムチャクチャな動きをし、

ブオーン！

マイに向かって突進してくる。

「ヤバっ！」

石ころがびゅんと飛び、マイもぱっと跳び出す。

「さようなら、ごきげんよろしゅう！」

「待ちなさいよ！ 当て逃げする気？ そうよ、もとはといえはおたくが悪  
いんじゃないの！ すべておたくのせいよ！ つまり、コンドロイチン、グ  
ルコサミン、ビタミンEにお茶漬け海苔は永谷園ってことじゃないですか！」  
絶叫とエンジンの轟音を後に、とつとと逃げるしかない。

——どうして、逃げてばっかしになるんだ？

ブリザードのおさまった南極は、氷の反射と星明りとでぼんやりと明るい。  
一気に遠くにまできて、エンジン音が聞こえなくなると、

——おつとつと……

さつきみたいに止まらなくなったらまずいと、スピードの調整を試みる。  
右足を前に出して、すつとそこに自分の体重をのせると、すつとなめら  
かに前進する。

——ほう、これって悪くないかも。

今度は左足を出して、すつとなめらかに前進する。

交互に足をすべらせて、だんだんとコツがわかってくる。スーっスーっと、調子よくすべれるようになる。

——気分いいかも。

すっかり慣れて軽やかな滑走になると、石ころもスピードをあげる。

——うまくすべれるようになったのはいいんだけど、なんだかますますわかんないよなあ。いまのおネエ系とは、もっと話に通じていいはずだったのに、あんなふうになってしまったって……ここはどういう世界？ カンガルーの言うてたとおり、でたらめだっていうこと？ ボクに何をやらせたいんだろう？ そろそろ、まともでわかりやすいことのひとつくらいあってほしいですよ。

そういう思いで石ころを見て、

——あれは、根性曲がりだから、100万ドルのでたらめを食らわしてくるかもしれないぞ。つまり、触らぬ神にたたりなしってことで……。

急いで目をそらせると、

「カーン」

耳の近くで鐘が鳴る。

——なにっ？ あいつがなんかした？ あっ、もしかして、南極点？

マイはとっさに体の向きを変え、スニーカーをななめにしてズズツとブレキをかける。うまく止まることができる。

見ると、アメリカ合衆国の星条旗と看板が立っている。ジオグラフィック・ポールだ。

——南極点を通ると鐘が鳴るんだっけ？ だれか言ってた？ オバコちゃん？ 本に書いてあった？ 学校の教科書？ 落語の本？ オオトカゲのあの黒い本？ それは絶対じゃない……はず。

後ろの様子をじっとさぐる。うすぼんやりと氷原の広がり。「死刑だ、死刑だ！」の声もなければ、雪上車の音もしない。

——だれも追いかけてこなくなつたよね。

鐘の余韻が耳からすっかり離れると、氷の大陸は完全に静寂そのものだ。

——南極点にひとりぼっちか。追いかけられるのはいやだけど、だあれもい

ないっていうのもどうかなあ……。

「あんちゃん、すまんが、ちよつと頼まれてくれんかいのう?」

いきなりの大きな声に、ぎくつとして振り返ると、麦わら帽子をかぶって犬をつれた浴衣姿のおじいさんが、

「あんちゃん、このシャッター押してくれんかいのう?」

カメラをにゅつと突き出してくる。

——えっえーっ、どっから出てきたの?

「シャッターですか?」

「ここを押してくれたら、それでよかとよ」

ひどく旧式のカメラを手渡される。

「おーい、このあんちゃんが撮ってくれつとよ。こつちきて並んだらよかとよ」

お年寄りの一団がどやどやと現れ、ジオグラフィック・ポールの前に整列する。

——これは、いよいよわかんないよ。どういうこと?



ぼやきながらもカメラを構えると、中腰になった1列目の前に横長の旗が  
つるつると広げられる。

「南極経由とげぬき地蔵のナイスな旅 あほバスツアー パート2」  
ナイスの3文字がさかさまにひっくりかえっている。

「では、頼んだつとよ。チーかまっ!」

おじいさんの号令で、みんながぼかみたいに口をぱかんと開け、マイはシ  
ヤッターを押す。

おじいさん、おばあさんが手をたたき、みんなの笑顔がマイに向けられる。

「ホンにあんがと。あんちゃんのおかげで、全員がそろって写真が撮れたつ  
とよ。あほバスのガイドさんがどっかに消えちまったんで、困ってたんよ。  
しよんべんだべか。さすがに南極だけあって冷えっからな。でもよ、こんな  
南極くんだりであんちゃんとかうのも何かの縁だつぺえよ。今度おらんとこ  
ろの村さきたら、そんなときはお礼すつからよ、寄ってくんろ」

「シヤッターを押したただけですから、お礼なんか……」

「いつでもきてくるろ。おらんところの村、わかっぺ。」

「いえ、どこですか？」

「わかんねえけ？ いま旗を見たっぺ。うちの村のこと書いてあったっぺえよ」

「ええと、とげぬき地蔵とありましたから、巢鴨ですか？」

「とげぬき地蔵は目的地でねえか。これから行くんだあよ。旗にナイスってあったっぺ？」

「そこだけさかさまになっていましたけど……」

「んだ。ナイの反対はなんだ？」

「アリですか？」

「だから、アリスだべ。アリスと言ったらなんだ？」

「ええと、『不思議の国』ですか？」

「パート2ってあったろう」

「じゃあ、『鏡の国』の方ですか」

「んだ。で、その反対だよ、わからんかあ。あんちゃん、落語知らんのかいなあ」

「えっ?」

落語オタクを自称するマイの顔が紅潮し、

「つまり、もしかして、松山村ですか?」

「んだ、んだ」

おじいさんは満面の笑みを浮かべる。

松山村は、落語の『松山鏡』に鏡のない国として出てくる。

「でも、松山村を言うのに、さかさまのナイスのパート2とはずいぶんもってまわっていますね。なかなかわからないですよ」

「だべ。あれこれいじつとかんと、すぐにパクリがばれたりしてもどうかなくて思っよ」

「パクリって、なんですか?」

「さあて、どういうことだべか。オバコちゃんに聞いてみなせえよ」

「えっ、オバコちゃんを知っているんですか？」

「ああ、知んねえな」

「はあ？」

——さっきから何かのパクリじゃないのかって思ってたけど、これって、アリスからパクった？ オバコちゃん？ どういうこと？ うーん、わからない……。

「んじや、行くべかな。だけんど、あほバスのガイドさん、まだ帰ってこねえのけ？ どつこに消えちまったかいな。あんちゃん見なかったか？」

「いいえ、バスも見ませんでしたけど」

「変わったガイドさんでよ、『あたしってやる気ゼロの人じゃないですか』っていうのが口癖で、だからよ、とつても頼りになるんだけんどよ」

「はあ？」

——さっきのおネエ系？ もう、ここまでわけがわからないと、まともに考える気にもならないよ。

石ころの方を見ると、すでに勝手にかなり先にまで行ってしまっているの  
で、

「じゃあ、みなさん気をつけて！」

マイはすべり出す。

——これで南極点を通過したのだから、これからは北に向かうことになるの  
のかな。

さつきと同じように調子よくすべりながら、

——これはこれで気分は悪くないけど、わけのわからなさが増すすひどく  
なっていないですか？ あいつのせい？ アリスのパクリだから？ そうだと  
しても、ボクは原作を読んでいないからなあ、なんのヒントにもならないよ。  
スマホがあれば「ウィキペディア」かなんかでちやちやっと調べちゃうんだ  
けど……。でも、まあいいか、どうせボクなんかは文学作品の主人公になる  
ようなキャラじゃないんだから。知らないけど、アリスとはぜんぜんちがう  
はずだよ。

しばらく石ころを追いかけて、

——こうやってですよ、追いかけたり、追いかけられたりで、ずっと続くというのもどうなんですかねえ。単調すぎて、そろそろ、げんなりげんちやんじやないでしょうか。キョンのやつが「あんたは始まってしまった中にいる。もう外には出られない」とか言っていたけど、こんなことでは出ちやいたくなりますよ。えーと、そもそもが、あの石ころをかけたから、こういうことになったんですよ。だったらですよ、もう一度あいつをやってやったら、もしかしてこのへんなことが終わったりするのかもしれない。ほう、これっておもしろいかも。ためしてみる価値はありますよ！

自分の思いつきに、マイはにんまりしつつ、

——でも、こっちがなんか思うと、あいつにすぐにわかっちゃうから、ここからは何も考えないようにしよう。よし、そうしよう。

マイはわざとスピードを落として石ころとの距離をあげ、心の内をからっぽにしてから、スピードスケートの選手をイメージしてからだを前傾させ、

ぐうつとスピードをあげてみる。

——いいじゃん、いいじゃん。よしっ、すべることだけに専念して、あいつを出し抜いてやれ！

びゅんびゅん飛ばすと、石ころもさるもの、速くころがるのだが、すべる方がころがるよりおのずと速いのであろう、石ころとの距離がだんだんと縮まる。

——いいぞ、いいぞ！

邪念を払って、スピードに乗りに乗って、見る見る追いついて、

——よしっ、ここだ！

その一念が敗着か、スピードに乗りきった自分の足を前にうまくけり出すことができない。

「あっ！」

みごとにすったおれ、ズズズッと、全身でブレーキをかけて、ごろごろころがって、

「いたたた」

ようやく止まって氷の上ですわり、前を見ると石ころがない。

——ん？ どうした？

立ちあがって前に進んでみるが、どう目をこらしても前方に石ころは見当たらない。

——とつとと先に行っちゃったのかなあ。

「ううう、寒い！」

ここで初めて寒さを感じる。

「寒い？ これって、なんかヤバいのかも」

——極寒の南極点にこの格好でひとり取り残されたら、ふつうは確実に死にますよね。

自分が軽はずみだったと後悔する。

——だから、ボクってだめなんだよ。沈着冷静に、先のことまでよく考えないと。ぐっと落ち着いて……。



寒さに不安がつるばかりで、落ち着けるものではない。

——あいつは、ホントに意地悪だよ。

「ちよっとお、どこにいるんですかあ？ そこらへんにいますよね」

つぶやきが氷の上にむなしく響く。

フードを思いきりひっぱり、パーカーの前をしっかりしめて、胸のGOR  
Oの刺繍を見て、

——ボクはゴローだ。ゴローはひとりになっても困りません。どうせまっすぐに行けばいいんだろう。わかっているさ、それくらいは。それにですよ、ここにウミネコの羽根がありますよ。こいつを渡すんだろう。引き受けたわけではないけど、ボクには用事があるんです。

そのことがマイに少しばかり力を与え、風は冷たくとも、がんばってすべて進んで行くと、前方にほんのりと明りが見えてくる。

——探検基地？ とにかくあそこに行けばなんとかなるかも……。

氷の小さな家があり、窓から光がもれている。

まっすぐにスーっとすべってちょうど玄関のドアの前に立つ。

コツコツとたたいてみる。

「はあい、どなたですか？」

中からやさしそうな声が返ってくる。

落語の似たような場面を思い出し、

「あのう、旅の者なのですが、夜道に迷いまして……。もしかして連れの者がこちらにおじやましていませんかでしょうか？」

少しばかり古風な言い方をする。

「あら、だれでしょうね、お連れって？」

「いましがた飛び込んできた石ころのことじゃないかな」

中で話し合っているのが聞こえる。

——石ころ！ いたんだ。

「それです。石ころです」

マイはほっとし、

——あいつをけつてやろうとか、もう思わないようにしよう。

「ちよつと待つてくださいね。いまあけますから」

カギをがちやがちやまわす音がして、戸が開く。光がさつと広がり、氷が白く輝く。

「さあさあ、おはいりくださいな」

それはペンギンの奥さんで、

「あら、まあ！」

マイを見た瞬間に、よほど驚いたのか、外の寒気によって瞬間冷凍されたのか、そのままかたまってしまふ。

「どなたがいらしたのかな」

ペンギンのご主人が出てきて、その後ろから、小さな顔がふたつのぞく。

「ほう、お珍しい、人間くんとは、珍客到来！ まあまあ、どうぞ中へ、どうぞ、どうぞ」

ご主人にうながされ、ぴよこんとおじぎをして、玄関からはいる。

「ご主人がドアをパタンと閉めて、ふっと息を吹きかけると、奥さんは解凍されて、ぎこちなく動き始める。」

「あつたか〜い！」

通された部屋はとても暖かい。

見ると、奥の窓辺にちよこんと石ころがのっている。

「お連れというのはあの石ころですか？」

「そうなんです、あれなんです」

そう答えながらも、あえて近づかないようにする。石ころが反応して窓の外に出て行ったりしたらすぐにまた追いかけて行かなければならない。

「ちよつとゆつくりしたいかも。ここは感じいいみたいだし。」

「ご主人は、」

「まあまあ、そこにすわってくださいいな。いま、熱いお茶でもいれましょう。急ぐわけでもないのですよ」

「はい。ありがとうございます」

遠慮はしないことにする。

「ご主人はお湯をわかしに行き、奥さんはまだ解凍が完全でないのか、じつと突っ立っている。子どもたちは奥さんのかけからマイをのぞいている。」

お茶の香りが部屋にただよい、

「さあ、どうぞ」

ひとくち飲むと、からだ全体にお茶のおいしさと温かさが広がり、ゆったりとした気分になる。口にもものを入れるのは、寄席でおにぎりを1個と野菜ジュースを飲んで以来だ。

「南極にもこんなすばらしいお茶があるんですね」

ウーロン茶に少しだけ似て甘い味がする。

「ええ、氷のずつと下の方にあるんです」

「冷凍保存しているんですか？」

「これはむかしむかし南極がずっとずっと暖かった時代にできたお茶なのです。太古の南極の香りがこもっているのです」

「そうなんですか」

マイの様子をもの珍しげに見ている子どもたちに、ご主人は、

「さあさあ、みんなはもう眠る時間じゃないのかな」

子どもたちは奥さんの背から出て、よちよちとベッドに向かいながら、

「じゃあ、寝る前にお話ししてよ」

「いつものことなので、寝かせてしまうまで少し待っていてください」

ご主人はベッドの脇にすわって話を始める。

ここでゆっくりできるのはマイの望むところなので、お茶を片手に聞く。

「むかしむかしのこと。小さな丘がありました。1本のヤマブキの木と1本の草が暮らしていました。毎年、春になると、ヤマブキは枝いっぱい美しく輝く花を咲かせ、草は目立たないごく小さな花を咲かせました。草はヤマブキの花をうっとり眺め、こんなにもすばらしい花を自分も咲かせられたらと思うのでした。

いつしか草はヤマブキに恋をし、その気持ちに通じたのでしょうか、ヤマ

ブキも草が好きになりました。ヤマブキは、雨や風の激しいときは、枝をおろして草をしっかりと守り、草は草で、大きな愛情でヤマブキの心を包みました。こうして、ヤマブキと草は愛し合って、世界には自分たちしかないような気持ちになりました。

ところが、ある春のことです。丘に数人の男がやってきました。ヤマブキはいつもにもまして美しい花をいっぱいに咲かせていました。男たちはスコップを取り出して地面を掘り始めました。ヤマブキと草は、何ごとが始まるのだろうかと不安になりました。男たちはヤマブキのまわりの地面をぐるりと掘り下げて、ヤマブキをまるごと抜いてしまいました。そして、トラックにのせたのです。ヤマブキは叫びました。『ぼくを連れて行かないで』。草は叫びました。『ヤマブキさんを連れて行かないで』。男たちには聞こえません。ヤマブキは泣き、草は泣きました。『さようなら』。車は走り去り、丘には草だけが残りました。風が悲しげに吹くと、草はすっかりしおれてしまいました。

ヤマブキが連れて行かれたのは大きなおやしきでした。その立派な庭に植えられたのですが、ヤマブキはすっかり元気をなくし、風が吹くと、花ははらはらと散って、最後に1枚だけ残った花びらも、西風に飛ばされて枝から離れてしまいました。それは風につて東へ東へと飛んで、あの丘にまでやってきました。風は、花びらをそつと草のかたわらに置きました。しおれていた草はヤマブキの花びらに気がつき、それをひきよせると、そのまま枯れてしまいました。

ヤマブキはおやしきのご主人に大事にされ、いろいろと世話を受けたので命だけは失わずにすみました。夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎて、また春がきましたが、いつまでたっても花は咲きませんでした。

丘では、以前に草がはえていた場所に新しい芽が出ました。芽はどんどん大きく育ち、葉が出て、茎が伸び、立派な草に成長しました。あたたかい春のひざしにつつまれて、草はつぼみをつけました。そのつぼみが開くと、ふしぎなことに、黄色いヤマブキそっくりな花が咲きました。花びらは日に輝



き、小鳥たちはその美しさをたたえます。

夕方になって、東風が強く吹きました。その風に花びらが1枚だけ花から離れました。花びらは風にのって西に飛んで行き、とうとうおやしきまできました。風は花びらをそつとヤマブキに渡しました。ヤマブキは気がつきませんでした。小鳥は告げます。その花びらがどこからきたのかを。

夜があたりをつつみ、そして朝がやってきました。お日様が出てヤマブキにはほえみかけると、ヤマブキは元気になって花を咲かせました。枝いっぱいの花です。それはそれはみごとな花でした。

それからは、毎年春になるとヤマブキとヤマブキにそっくりな花を咲かせる草は、いつも同時に花をつけるようになったのです。その草はヤマブキノウというのです」

子供たちはすっかり寝入った。奥さんも立ったまま眠ってしまった。

マイはそつとカップを置いて立つ。

「どうかされました？」

ペンギンのご主人が振り返る。

「ボクは行きます」

「まだいらしたばかりではないですか」

「いつまでもここにいては申しわけないので……」

自分の気持ちをうまく言い表わすことができないが、ここに自分がいるのは似合わないと感じている。

ご主人が引き止めようとするのに対して、

「ボクは行かなければならないんです。ボクは旅の者なんです。あの石ころと旅の途中なんです」

——でも、ボクは何をしているんだろう？

意味のわからなさに、ずしんと心に重いものがのしかかってくる。

それをまぎらわすように、上方落語の「旅ネタ」が頭の中にぼわっと広がる。「旅ネタ」は多数の噺の集合体で、全てを演じたら何十日もかかるとんでもない長さがある。

『東の旅は伊勢神宮のにぎわい、西の旅は兵庫船のフカの魅入り、北の旅は池田の猪買い、南の旅は紀州飛脚、冥途の旅では地獄八景亡者の戯れ、天へ昇りましては月宮殿星の都……』(東の旅の発端)

——ボクはこういうところに落ち着いてはいけないんだ。前に行くことから抜け出ようと思つてはたぶんいけないんだ。

「旅はどちらへ行くのですか？」

「どちらというあてはございません。ただ北へと行くのでござんす」  
急に股旅者のゴローになる。

——そう、帰る家もない放浪の旅……。

「でしたら北極に行きますよね」

「北へ北へと行けば、あるいはそうなることもございましょう」

——南極から北極へ？ 本當かいな。

「でしたら、北極の白クマに届けていただきたいものがあるのです。お願いできないでしょうか？」

「白クマさんでござんすか？」

「ご主人はすぐに戸棚から小さな封筒を取り出しきて、マイの前に差し出す。

「これです。いつかあなたのような人がきてくださると思っていました」

「旅から旅のしがない旅ガラスですから、首尾よく会えるでござんしょうか？」

「きつと会えます。だいじょうぶです」

ペンギンはにっこりほほえむ。

マイはかっこつけて、

「よろしゅうござんす。白クマさんにお会いできたらきつとお渡ししまし  
う」

——またひとつ用事が増えたよ。ボクって軽はずみだよなあ。

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

窓がぱつと開いて、石ころが外に飛び出す。

「じゃあ、あつしはこれで」

封筒を後ろポケットにしまい、パーカーのフードをちよつとななめにかぶり直し、窓に手をかけて身を乗り出したところで、

——そうだ、今度こそ聞かなくては……。

「あ、このウミネコがこなかったでしょうか？ 尾羽が1本だけ金色のウミネコです」

早口で言う。外からの冷たい風が吹き込んでくる窓を開けたままにしておくのは悪いし、先に行ってしまった石ころをまた見失ってしまわないかと気にもなる。

ペンギンのご主人は変わらずにゆつたりとした口調で、

「ウミネコですか。そうそう、たしかにここにきました。ふぶきの晩でした。その戸にドタリと何か当たる音がしたので、出て行くと、ウミネコが倒れていました。おっしゃる通り、尾羽が1本だけ金色でした。やせ細って、体がすっかり冷たくなっていました。このままでは死んでしまうのではないかと、なかに運び入れて、火の前にもって行き、今日と同じにお茶をわかして、

ひとくち飲ませてやりました。するとウンと言って、気がついたのはよかったです。『しばらく休んだら』と言ったのですが、返事もせずに、パツと飛び出して行ってしまいました」

マイの胸にチクンと刺されたような痛みが走る。

——いまのはこの羽根のせい？

それをそつと抑えて、

「さようなら——」

窓から飛び出す。はるか先に石ころがわずかに見えている。